



The Royal Photographic Society

Patron: Her Majesty The Queen. Incorporated by Royal Charter

NEWS LETTER

第8号 2006/11/07

英国王立写真協会・日本支部

発行所 〒100-0014

東京都千代田区永田町 2-17-5

ローレル永田町 510

Tel 03-5251-4311

Fax 03-5251-4501

E-mail yoshi-rpsj@mm.em-net.jp

発行人 藤井悦男 編集人 川村賢一

支部活動の発展を願う

(18年度総会ご挨拶)



王立写真協会日本支部
理事長
藤井悦男

皆様ご承知のように、ちょうど今年で、日本支部が設立されて、10年になるわけでございます。

記念すべき年でございますが、その経過を見て参りますと、最初の頃は、必ずしも支部としての活動は、はっきりしておりませんでした。

ここ3年から4年ぐらい、役員の方々や前理事長のご尽力によりまして、だんだんと支部の活動が具体化して、実行されて参りました。

最初は「写真展」を中心といたしまして、この活動が続けられてきた訳ですが、その後「デジタル研究会」とか、「ニュースレター」の発行とか、そういうことが軌道に乗りまして、とくに、今年からは「ホームページ」の構築が本決まりになりまして、いよいよこの総会後から、RPS日本支部のHPが実施されることになりました。

英国本部との交流、世界の各支部との交流、情報交換というものが、これを通じて、急速に盛んになっていくものと思われま。

このように、会員の皆様のご協力、理事会の皆さんのご努力によりまして、この支部もいよいよ本格的な支部活動、RPSの一部といたしまして、日本の活動がはじまることを大変心強く思っております。

会員数は、ご承知のように、RPSの会員をもって構成しておりますので、必ずしも多いとは思いませんけれども、会の皆様方に我々この会が、何らかのメリットを皆さんに、発揮して頂くということで、いろいろと活動を展開していきたいと思ひます。

皆さんのご意見を頂きまして、会が実質的に会員の皆様に、何らかの存在価値のありますような活動を具体的にしていきたいと思ひます。何卒積極的にいろいろなお知恵なり、要望なりを頂きまして、会を発展させていきたいと考えております。

大変簡単ではございますけれども、これをもって本年度の総会のご挨拶とさせていただきます。

よろしくお願いいたします。

日本支部ホームページ開設！

9月中旬、英国王立写真協会日本支部のホームページが開設されました。藤井前理事長と制作会社ネクスティス、事務局のご協力で一応の体裁を整えることができました。パソコンに不慣れな方でも閲覧できるよう、トップページには各ページの内容を示す小見出しを付け、全体構成がわかるサイトマップを1ページ加えました。まだ、未完成ですが、これからの更新で充実させていきます。ぜひアクセスしてみてください。

URLは <http://www.rps-japan.org> です。日本支部発展のため、お知り合いの方々へホームページ開設をアナウンスしてください。ホームページをお持ちの方は、本ページへリンクしていただけたら幸いです。本ページからもリンクさせていただきます。また、記事や写真の投稿、出版や写真展の告知もできます。大いにご活用ください。

(豊田芳州)



日本支部HPのトップページ



R P S 日本支部 10th Anniversary

●1995. 7. R P S 日本支部設立準備会



●1996. 9. 英国大使館にて
R P S 日本支部設立総会&レセプション開催



●2000. 6. ニュースレター創刊準備号発行

●2002. 4. ニュースレター創刊 1号発行

●2002. 7. 第1回写真展
(ギャラリー・アートグラフ)



●2003. 12. 第2回写真展
(ギャラリー・アートグラフ)

●2004. 8. 第1回デジタル研究会開催

●2004. 10. 第3回写真展
(ドイ・フォトギャラリー)



●2005. 2. 第2回デジタル研究会

●2005. 8. 第4写真展
(代官山フォトギャラリー)

●2005. 11. デジタルカメラ講習会
(撮影実習&ショールーム見学)

●2006. 9. 日本支部ホームページ開設

●2006. 10. 第5回写真展
(スポット・フォトサロン)

●会員ブログ訪問（会員のブログやHPを紹介します。）

新しい写真の波

インターネットの普及で、写真の位置づけが変わった。ホームページやブログで写真を公開する楽しみが増えたのだ。写真業界もこれを前提にして開発や企画を進めている。レポート、日記、提案、研究、作品などで写真は大きな役割を演じるだろう。（豊田）

【撮影データ】

オリンパス E-330

ズイコーデジタル 14 ～ 54 ミリ

F2.8 ～ 3.5（38 ミリで撮影 35 ミリ判換算 76 ミリ）

絞り F6.3 オート（5 秒） - 0.3EV

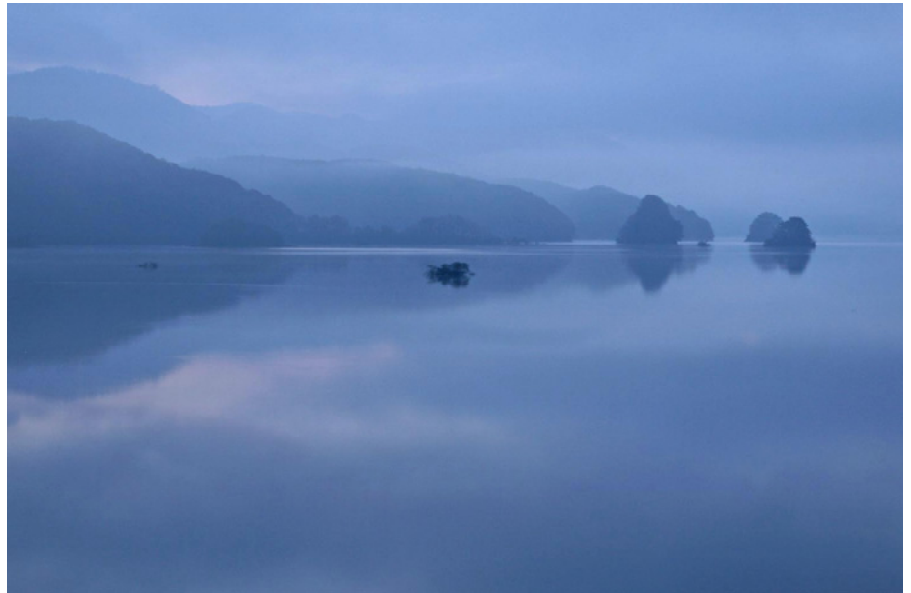
ISO200 WB 晴天

「豊田芳州のTheme」

<http://silent-forest.cocolog-nifty.com/>

2006/11/03

見えない風景を撮る喜び



裏磐梯で自身の限界を超える

早朝 5 時に「ペンションどんぐり」を出発した。オーナーの宮野正昭氏の案内で秋元湖の湖岸に立った。暗いうえに朝霧が立ち込めているので風景はよく見えない。沖に島影がかすかに見え、ここは有名な撮影スポットらしいとわかった。今までに多くの作品で見てきた撮影名所のようなのだ。周囲にはほかのグループが集まってきた。しかし、まだシャッター音は聞こえない。ほとんどのカメラマンは、暗いので撮影には不向きと思っているようだ。それに、ねらいは朝焼けなので、それを待っているのだ。

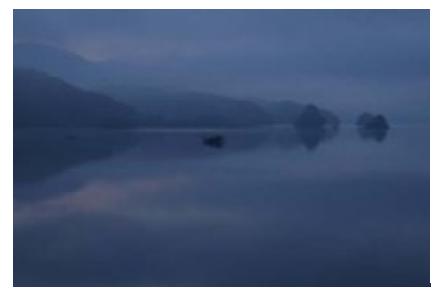
私は、カメラのオートに任せてシャッターをきってみようと考えた。マニュアルで露出調節ができる明るさではないからだ。こんなときこそオート露出は役立つはずだと思った。暗い風景でも、カメラが目に見える適正露出にしてくれると想像した。私は普段、風景撮影ではオート露出は絶対に選ばない。マニュアルに設定されていたオリンパス E-330 を、絞り優先 AE、ESP 測光（分割測光）、シングル AF に切り替

え、シャッターボタンを押してみた。しかし、シャッターはきれない。被写体コントラストが低くオートフォーカスが作動しないようだ。そこで、懐中電灯でカメラを照らしながらマニュアルでピントを無限遠（ ∞ ）に合わせ、シャッターボタンを押してみた。するとシャッター音が聞こえた。すぐ再生してみると、モニターに暗い幽玄な風景が写っていた（写真小）。それをパソコンで少し明るくし、コントラストを高め調整したのが大きいほうの写真だ。見えない風景が写真になった。

E-330 のモニターに映った写真は、私たちの視覚はもちろん、思考や感性を超えた風景と言っていいたいだろう。見える風景とは違った新鮮さがある。恩師の故 田村稔先生が「見えないものとれて一人前」と話されたことを思い出した。一方、カメラのオート機構は写真の可能性を拡大してくれると感じた。写真は撮ってみたいとわからない。シャッターをきらなければ始まらないということだ。この後、天候は我々に味方せず、このカットがその朝のもつ

とも気に入った写真になった。

この撮影行で裏磐梯の魅力がわかった。これは、宮野正昭氏の綿密なガイドのおかげだ。裏磐梯には、いたるところに湖沼や滝があり自然度を高めている。また、大きな湖には大小の島があり、これが霧に包まれて神秘的な風景を作る。磐梯山の噴火で湧水や溪流がせき止められて、このような変化のある自然と風景ができたのであろう。宮野氏は、食事のときパソコンのモニターで自身の作品を見せてくださった。これがすばらしい。裏磐梯の魅力と撮影ポイント、季節感の紹介、またデジタルカメラやパソコンについてもアドバイスしていただいた。



放談・デジタル アナログ

構成：豊田芳州

〔1〕

平成18年度日本支部総会で収録された座談会の内容を数回にわたって連載します。

参加者は総会出席の支部会員です。日本支部、初めての試みです。

司会：デジタル写真が写真界のメジャーになってきた一方、アナログ（銀塩）写真のメリットも見直されています。

そこで、それぞれの長所・短所を自由に話し合ってみたいと思います。

放談としたのは、自身の知識と経験の範囲でお話いただき、成否、真否を気にせずに進めたいという趣旨です。まず、色と諧調について問題にしたいと思います。

リバーサルフィルムには、発色と諧調という目に見える基準がありますが、デジタルには基準がないといえるのではないかと。

すなわち、デジタルでは色見本プリントを添付してはじめて伝達手段（作品や記録など）になる。色見本ははたして被写体を再現しているのだろうか、基準になるのだろうか。まず、フィルムの色や諧調の基準についてAさんお願いいたします。

Aさん：フィルムだからといって被写体の基準色が出ているということはありません。基準となる発色の製品は市場では必ずしも受けない。

我々は、色相といって色の方向性を問題にしています。

フィルムには、色相を被写体に忠実にしようというタイプと、イメージカラーと言って色を強調するタイプがある。イメージカラータイプが市場では受けている。

諧調についても現在市販されているフィルムはだいたい硬い。高調、高彩度でイメージカラータイプのフィルムがアマチュア界、プロ界では主流になっている。

司会：フィルムの実情をうかがったので、一方のデジタルについてBさんにうかがいましょう。

Bさん：私はフィルムも使っていますが、圧倒的にデジタルを多く使っている。やや乱暴な言い方かもしれないが、ネガフィルムの諧調レンジを0から100としたら、リバーサルはその60パーセントぐらいしかない。デジタルはそのまた60パーセントぐらいしかない。デジタルには諧調レンジの狭さがある。

そこで、デジタルの白とび現象が問題になる。白とびは、諧調の情報がないので写真がなさないものになってしまう。それをいかにきちんと出すかがデジタルカメラの上手な使い方になります。私はデジタルカメラを使うとき、最初からベルビア調に設定するか、プロビア調に設定するか決めておくことで後でらくになる。すなわち、はじめから諧調のレンジを調節している。

もうひとつ、パソコンを使うときの液晶モニターの色調が派手になってい

る。また、色温度が9000°Kぐらいあり、モニターとプリントの色にギャップが出る。私は、カラーマッチングソフトを使って、モニターとプリンターの色をマッチングさせてプリントアウトしている。モニターは6000°Kに調整し、パソコンを使う環境にも合わせ、モニターで調節すると、だいたいフィルムに近い感じになる。近いといってもフィルムの60パーセントほどの諧調しかないので、それを意識して「硬めに派手に」というデジタルの長所を生かした作品作りが大切だと思う。

司会：デジタルは、フィルムの60パーセントという説明がありましたが、目標はフィルムということでしょうか。

Bさん：フィルムに近づけようとする表現です。最近、フォトショップCS2というソフトは、ハイライトとシャドウの諧調を出せる機能があり、これをうまく使うとフィルムに近づけることができます。

司会：フィルムとデジタルについて、それぞれの現状やご意見をうかがいました。これらを総合して、私たちは何を目標に色や諧調をコントロールしていけばよいのか、さらにご意見をうかがいたいと思います。

（次号に続く）

支部第5回写真展開催

2006.10.20.～10.26.

東京銀座スポットフォトサロンにて



（編集後記）

藤井理事長の総会での挨拶を掲載させて頂いたが、現在、藤井理事長はご家庭の事情で、理事長をやめられ、現在空席となっている。

新理事長が決まるまで、大野副理事長に代行をお願いしている。

編集のプロである前任者がホームページ担当となり、ニュースレターの大役を私が引き継ぐことになったが、原稿依頼の方法をはじめ、編集にも不慣れなことが多く、豊田氏の協力でやっとの事で発行にこぎ付けた。

今後も原稿あつてのニュースレターですので、皆さんのご協力をよろしくお願い致します。HPやブログの情報もお寄せ下さい。（川村）